



初學和歌式

讀方
詞寫

特別
イ 4
3163
78(I)



九 郭注莊子

八 郭注莊子

七 郭注莊子

無想

無想心經

心經

有覺長白大人著

有賀長伯大人著

初學和歌式

京都

須磨弘簡堂藏

初學和歌式目錄

○一卷

- 一歌と可公始事
- 一歌の公と深く可入事
- 一字歌といふ事
- 一弦歌といふ事
- 一歌と日ら可淡事
- 一歌と初五文字の玉やう次事
- 一歌とまのこといふ事
- 一歌とこへせて淡事

初學和歌式目錄

一歌と中況みゆづりて漢事

一歌と中寄みゆづりて漢事

一歌と貴勢とて漢事

一歌のゆづりて漢事

一歌と下位とて漢事

一雜歌乃事

一雜文の歌の事

一傍歌乃事

一片歌の事

一落歌乃事

一かりろく流れぬ歌の事

一實字の事

一虚字の事

○月二卷至三卷

一歌よおぬおぬ 并 四季と雜入歌流すの事

一名はの寄流すの事

○五卷

一中寄とりやうの事

一返寄の事

一兼歌寄の流すの事

一和歌撰りのり

一和歌字四のり

一和歌と漢(言)を抄のり

一和歌と漢(言)のり

一和歌乃初のり

○月五卷至七卷

一三代集詞寄

○七卷

一和歌詞諸抄註釋後萃

凡和歌乃讀方を教へしはひまへの
 勲腦式等世に流布しむれも多し
 中つととも稚児乃初学を遍く窺ひ
 記るるをあらはしむく握執せしは古
 賢れ庭訓の濱千鳥はある物なり
 沖津玉藻乃よき大いなり似り仍諸
 抄を後萃し師範等録なりて全

部七冊初学和号式と号の本より
 書蒙乃助中しきし。為す事なり
 ありりたりし。心な人乃たは
 せえむこや

うらみおぼそのし

初学和号式

卷一

題之讀す

歌と可んぬ事

歌と可ぬりしは先歌の文字けりしは実字あり

虚字あり 実字虚字の 或は歌のんことりては

歌ありしは 或は 或は長歌なれは

ありしは 或は 或は長歌なれは

は 或は 或は長歌なれは

○歌と可んぬ事

歌と可んぬ事

初学和号式

歌と可んぬ事

歌と可んぬ事

歌と可んぬ事

後

新字

後成



あはれよ千代のころしきのあはれつる月日かみりかき
光 千代 通叙

あはれよ千代のころしきのあはれつる月日かみりかき
あはれよ千代のころしき

あはれよ千代のころしき
あはれよ千代

あはれよ千代
あはれよ千代

あはれよ千代
あはれよ千代

あはれよ千代
あはれよ千代

あはれよ千代
あはれよ千代

一庭訓抄の巻云々とありん歌をとありん歌をとありん歌を

とありん歌をとありん歌をとありん歌をとありん歌を

とありん歌をとありん歌をとありん歌をとありん歌を

とありん歌をとありん歌をとありん歌をとありん歌を

とありん歌をとありん歌をとありん歌をとありん歌を

とありん歌をとありん歌をとありん歌をとありん歌を

とありん歌をとありん歌をとありん歌をとありん歌を

りてその時をよめぬものも花の宿見の使ちりたり

晴霞

悪文正吉

家隆

うつし晴ちるるよもなほ花の宿見の使ちりたり

夕花

毎中友七郎

為友

花よももよもなほ花の宿見の使ちりたり

秋夕霞

白川友七郎

為家

こころのゆかりも夕花の宿見の使ちりたり

一三原秋決

為家

云秋霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

虫をののびの秋夕霞とありん秋夕霞とありん

れ秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

とくも秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

らも秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

お月秋霞の秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

よ秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

おひ入かたも秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

とまも秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

あつ秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

野云 秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

あつ秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

晴霞 秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

つれ秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

夕晴雨 秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

あつ秋夕霞とありん秋夕霞とありん秋夕霞とありん

よつていふ

一 和音用意

三音節

云云 和音の用意は、和歌の字に、三音節の字を、

のちの字と無尤不決、三音節の字を、三音節の字と、三音節の字と、

又を、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

一 収目抄 基後 云歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

歌も必決、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云

雪か

道徳

雅量、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云

新古今

定家

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

又曰歌と云

新古今

有歌

又曰歌と云、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、三音節の字と、

あまのこはむらさきをけりて麻の穂をこぼしてさくろ丸
藤の穂をこぼしてせう水といふはあまのこはむらさき

新古今 定家

あまのこはむらさきをけりて麻の穂をこぼしてさくろ丸
藤の穂をこぼしてせう水といふはあまのこはむらさき

新古今 定家

あまのこはむらさきをけりて麻の穂をこぼしてさくろ丸
藤の穂をこぼしてせう水といふはあまのこはむらさき

新古今 定家

あまのこはむらさきをけりて麻の穂をこぼしてさくろ丸
藤の穂をこぼしてせう水といふはあまのこはむらさき

新古今 定家

あまのこはむらさきをけりて麻の穂をこぼしてさくろ丸
藤の穂をこぼしてせう水といふはあまのこはむらさき

新古今 定家

あまのこはむらさきをけりて麻の穂をこぼしてさくろ丸
藤の穂をこぼしてせう水といふはあまのこはむらさき

新古今 定家

あまのこはむらさきをけりて麻の穂をこぼしてさくろ丸
藤の穂をこぼしてせう水といふはあまのこはむらさき

新古今 定家

あまのこはむらさきをけりて麻の穂をこぼしてさくろ丸
藤の穂をこぼしてせう水といふはあまのこはむらさき

この花といふはるるもどまりのり

賢恋

新古今

日

この花のめこと二人の情をさそひてはなすことなほさしきり
この花のめこと二人の情をさそひてはなすことなほさしきり
なほり賢なるの比ありんかまも物まきりことし

侍恋

玉葉

たふらまき

このけい情なすぬくれもあつておむじよこさあけぬる
偽りしぬたれめあつておむじよこさあけぬる

群恋

法千載

海峯氏

うきことこころは遠くは天川を流す遠くはこころを流す
こたの幸よ二枚の雲よよとて群心とりのせり

逐目情恋

千載

院

空海さるるの洞よこころを流すのよ乃社なるりこころは

山家送舞

新古今

藤原法隆

きりぎりすもあつてこころはあつてこころはあつてこころはあつて
入るなり初はまのこころはあつてこころはあつてこころはあつて
木をうけてはなすこころはあつてこころはあつてこころはあつて
くちりりこころ

遠鐘送

新勅撰

入る二不祝王

初鐘あつて乃鐘のをなれはこころはあつてこころはあつて
いさひいさひこころはあつてこころはあつてこころはあつて

竹有佳色

新千載

当寺院

百あやせとふ竹の枝とよまのぬらよのまきこころはあつて
うつくぬ千世のまきこころはあつて佳のまきこころはあつて
有乃字はあつて
なほこころはあつて不可勝斗各准して可也

これどお極秀なつたれ各あゝ歌乃書歌うとて

新樹 を法弄合

きくりちち入妻の朝より霞ひかのやをまらうらん
所判 ほまひ なるまのし名のやをまらうらん
る歌の心まらうらん名はかり霞ひか
るの歌と能きまら名はかり霞ひか
おも霞の心まらうらん

新樹 六百五弄合

る歌うとりしにかうあうして秋そめ入んまらうらん
判 信成 なるま新樹と不弄して秋そめ入んまら
うらんしつるまらうらんやまら新樹のまらう
と弄歌とてして秋おまらうらん
弄歌とてしてや又弄歌もやまらうらん

秋夕ハ物なりしとてまらうらん
つよし弄歌ぬこれど秋夕ハ物なりしとて
うらん、歌うらん、一概に弄歌

歌のゆきとて

まらうらん、海乃物なりしとてその物なりしとて
海乃物なりしとてまらうらん、歌とてひらうらん
まらうらん又ハ歌とて海乃物なりしとて
まらうらん又ハ歌とて海乃物なりしとて
まらうらん又ハ歌とて海乃物なりしとて
まらうらん又ハ歌とて海乃物なりしとて

歌とてトトよとて

一和弄用弄よま又歌乃やうまらうらん
トトよとてトトよとてトトよとて

三のうらりるるどまき入ぬれこころいづれひのりどきこま
用譬喩ふ 其中衆生悉是我子

こころごとしうぶ影をん世中ふつら法乃あつるものと
ふれいんどうりそ物あもよまこころいづれひのり
まきこころいづれど

傳歌の草

一 畏同覺注云傳歌とすところの歌のあまし物を詠
くはこころをやみよみんぬ又寄歌ある中よみあもあ
よもある歌のりすと傳歌とも傳歌とすはた三十五
十そよみかりぬれこのこころいづれひのりどきこま
歌乃あましんと歌よ成をまむ社乃歌のあま又あまよ
あんとこれとよみあむ方聖業まむ又三そ五そいこ
こころいづれんとまきいん傳歌よ二そいかり是そ

んころいづれ也又ち和記くびよのころいづれひのりどきこま
詠よせの歌よ呼しあまかむころいづれひのりどきこま
歌よ成を成あむと引らむらぬんと又よまこころいづれ
まむとまきこれまむいそつれまむらりて傳歌う詠とな
まむこれいづれ傳歌し又

一 六百五十五合 社名

あまこれいづれひの鹿の祓の中くよ社の社名しりり
判^{傳歌}まむ山はくはこれと社名ぬれらるも鹿乃詠まら
てぞげくこれいづれ鹿乃歌よまふあまこころいづれひのり
これもあまらひ鹿のこころいづれいづれ傳歌よかりこころいづれ
一 支那寺持政家名合 寄社名
ころいづれいづれまむらり人のをこころいづれ
判^{支那}傳歌乃衣まむらり判かりこころいづれ

和名新書

一八雲は竹を歌よむとて及物を洗入して浴あり連き乃傍歌
のこゝろに〜
もあつたまの歌よ物の物とつゝな〜
乃草池を引ぐ〜
てしあつた〜
志ろつと歌の物らう〜
は傍歌よなれ〜
そゆら〜

片歌の事

一 片歌病とてちのちのちのひひ〜
一 事歌ヤノ去 細川宮御下代 佐方家佐 云片歌とら〜
川と洗〜
物二と洗〜
て當と〜

漢歌の事

一 一 事歌ヤノ去 細川宮御下代 佐方家佐 云片歌とら〜
川と洗〜
物二と洗〜
て當と〜

た〜し〜く〜洗れぬ歌乃事

一 一 事歌ヤノ去 細川宮御下代 佐方家佐 云片歌とら〜
川と洗〜
物二と洗〜
て當と〜

和名新書

十一

五言集卷之六

七

暮色の光あふくは世をうしなせりやむらさき

青木源

五言

秋意

○ 傷 ○ 秋夕傷心。見月佛光之歌し

秋夕傷心

千尋

作集

見月佛光

千尋

秋意

○ 厭 ○ 被厭意之歌し

被厭意

作集

後在在後

○ 到 ○ 野む到暮之歌し

野む到暮

千尋

作集

○ 何 ○ 妙花何在、吹鐘何寺之歌し

妙花何在

作集

清物

吹鐘何寺

千尋

作集

○ 忘 ○ 忘早苗。忘別意之歌し

忘早苗

白川友七郎

行旅

忘別意

作集

後在在後

○ 送 ○ 帰一途。送う秋云之歌し

帰一途

千尋

在後

五言集卷之六

七

多あての何も好くもあつるをいふてつうくさるるの如く
遠く都へ 後鳥羽院

○ 恥 花恥老 兼 兼 兼
母のくもも今もけつらん字親のやまをくももさるる心乃里人
流如光之教し

○ 拵 凡拵 兼 兼 兼
世あつてくも老やうくもて流あはくもくも心乃やつれりては
凡拵流花之教し

○ 晴 晴天 兼 兼 兼
兼心いふませうくもあつる流さるる心乃の如くもさるる心
晴天晴し 五月雨情之教

五月雨情 日 兼 兼 兼
うくの心あつる心乃の如くもあつる心乃の如くもさるる心乃の如くも
兼 兼 兼

○ 物 目との教流くもあつる心乃の如くもあつる心乃の如くもさるる心乃の如くも
物花 兼 兼 兼
兼心いふませうくもあつる流さるる心乃の如くもさるる心乃の如くも

物恋 兼 兼 兼
兼心いふませうくもあつる流さるる心乃の如くもさるる心乃の如くも

○ 早 草花早 兼 兼 兼
兼心いふませうくもあつる流さるる心乃の如くもさるる心乃の如くも

○ 似 兼 兼 兼
兼心いふませうくもあつる流さるる心乃の如くもさるる心乃の如くも

○ 白 兼 兼 兼
兼心いふませうくもあつる流さるる心乃の如くもさるる心乃の如くも

○ 鏡
とていふて花の白くも臨むるの鏡みたるも花乃下を
。花乃始鏡之歌、

花乃始鏡 夜集 善哉

○ 漏
。震漏遠樹。漏夜郭云之歌、
。震漏遠樹 陸古今 定家

漏夜郭云 乳 雲白

漏夜郭云 乳 雲白

○ 透
。きふ山影。透山影云之歌、
。きふ山影 山影 山影

透山影云 山影 山影

透山影云 山影 山影

○ 雨
。雨音雨社。雨音雨社云之歌、
。雨音雨社 雨音雨社 雨音雨社

雨音雨社 雨音雨社 雨音雨社

雨音雨社 雨音雨社 雨音雨社

○ 解
。氷解之歌、
。氷解之歌 氷解之歌 氷解之歌

氷解之歌 氷解之歌 氷解之歌

○ 音
。音偶音之歌、
。音偶音之歌 音偶音之歌 音偶音之歌

音偶音之歌 音偶音之歌 音偶音之歌

○ 近
。近音。近音之歌、
。近音。近音之歌 近音。近音之歌 近音。近音之歌

近致

白川及七百

長文

こころのちかひのちかひをこころのちかひにこころのちかひをこころのちかひに

近意

近集

後松原後

こころのちかひのちかひをこころのちかひにこころのちかひをこころのちかひに

契

契意之歌

契意

行後撰

后下定家

こころのちかひのちかひをこころのちかひにこころのちかひをこころのちかひに

散

散意之歌

散意

近集

後松原後

こころのちかひのちかひをこころのちかひにこころのちかひをこころのちかひに

誓

誓意之歌

誓意

千和

後松原後

こころのちかひのちかひをこころのちかひにこころのちかひをこころのちかひに

両

鹿声両方。両方意之歌

鹿声両方

近集

雅行

こころのちかひのちかひをこころのちかひにこころのちかひをこころのちかひに

両方意

新集古今

長

こころのちかひのちかひをこころのちかひにこころのちかひをこころのちかひに

遅

遅意之歌

春日遅

近集

道行

こころのちかひのちかひをこころのちかひにこころのちかひをこころのちかひに

送

送意之歌

送下送句

日

近集

こころのちかひのちかひをこころのちかひにこころのちかひをこころのちかひに

送

送意之歌

送日送盛

歌

永保伝

伝恋

百集

後和歌度

○帰 旅人の身がうつろひてゆくをいふ歌
○寄 寄所各之歌

鳥呼答

新古今

信安

○妻 妻恋之歌
○妻 妻恋之歌

妻恋

新古今

房長

○兼 兼恋之歌
○兼 兼恋之歌

兼恋

新古今

師業

○雑 雑歌之歌
○雑 雑歌之歌

雑歌

日

日

○依

依恋待恋 依恋待恋之歌
依恋待恋 依恋待恋之歌

依恋待恋

新古今

日大

依恋待恋

新古今

日大

○存

存恋 存恋之歌
存恋 存恋之歌

存恋

新古今

日大

存恋

新古今

日大

○雑

雑歌 雑歌之歌
雑歌 雑歌之歌

雑歌

新古今

後和歌度

百集百集

七七

○ 對 〇 對水侍月之歌
くへおきておぼやめりるがゆえにて海を來れば乃歌るは

對水侍月 今集 其後

○ 適 〇 適逢魚之歌
夏乃秋の月侍程のてささかよきりるをれ美しきあり

適逢魚 乳 小侍後

○ 意 〇 柳意系
それとてはさうおを月はさうかたをさしひつたれとて

柳意系 今集 後拾遺

○ 下 〇 下志系之歌
涙とてり夜にのれさうさかみくめをさすのいせ

下志系 今集 道後

○ 遠 〇 遠物魚之歌
遠物遊 遠古今 今集

○ 深 〇 深淵系之歌
深淵系 今集 今集

○ 添 〇 添色系之歌
自家の御もあはれなりとてこれたみよとて

添色系 今集 今集

○ 連 〇 連峯系之歌
連峯系 今集 今集

○ 連 〇 連峯系之歌
連峯系 今集 今集

○ 連 〇 連峯系之歌
連峯系 今集 今集

○ 連 〇 連峯系之歌
連峯系 今集 今集

○昔
○鶯若春之歌
ふらふらふのそをかりぬ川ほとけのこころはらふらふとつらぬ

鶯若春

新勅

修雅

○積
○積雪之歌
素雪とふ雪のまじりて雪のまじりのめりて雪のまじりて雪のまじりて

積雪

修雅

乳白

○摘
○摘葉之歌
よばちうらなもはらわらんよばちのやうによばちのよばちのよばちの

摘葉

千尋

若年

○常
○常世之歌
あたらしく秋のまじりてつと入てふれいふてふののののの

常世之歌

千秋

白川後

○守
○守まな○他も平次之歌

守まな

歌林

え者

ふさくはらふ秋のまじりてつと入てふれいふてふののののの

○長
○秋夜長之歌

秋夜長

歌集

歌集

○馴
○鶯馴之歌

鶯馴

日

道平後

ふらふらふのそをかりぬ川ほとけのこころはらふらふとつらぬ

ふらふらふ

通俊

○ 慰
いづれは舟木の岸のおもひに結ぶとこれとこれと
○ 花慰老之歌し

花慰老
中集
後拾遺

○ 寵
年くの花はさうりけかゝりけはあはれ
○ 柳藤花之歌し

柳藤花
中集
新集

○ 歌
あはれはさうりけかゝりけはあはれ
○ 歌無名恋

歌無名恋
中集
新集

○ 空
侍部空明之歌し

侍部空明
日
西行

子奴かゝりけかゝりけはあはれ

○ 群
雪満群山之歌し

雪満群山
新集
かまの親雅

○ 結
柳結落花之歌し

柳結落花
歌
花守大友

○ 恨
あはれ乃柳の名かじりてあはれ
○ 恨恋之歌し

恨恋
後集
歌

○ 内
年肉之妻
○ 年内之妻之歌し

年内之妻
新集
後拾遺

○ 海
あはれ乃海之妻
○ 海之妻之歌し

○動 ○凡動許花之類

凡動野歌 歌集

後成

○後 ○五後月之類

五後月 新古今

宮内省

○後 ○五後月之類

五後月 新古今

宮内省

○後 ○五後月之類

五後月 新古今

宮内省

○後 ○五後月之類

五後月 新古今

宮内省

月物界

千尋

作集

○延 ○思花延齡之類

思花延齡 歌

歌集

○思 ○思花延齡之類

思花延齡 歌

歌集

○多 ○早苗多之類

早苗多 後集

後集

○情 ○情花之類

情花 歌集

歌集

こゝろ侍公のうりどくくさめて雲のつら月を影を交ふら

深山松 全集 松平元太郎

○ 松 松平年之歌 松平年之歌 松平年之歌

松平年 松平年 松平年

○ 古 古柳 古柳 古柳

古柳 古柳 古柳

○ 舊 舊曲 舊曲 舊曲

舊曲 舊曲 舊曲

こゝろ侍公のうりどくくさめて雲のつら月を影を交ふら

○ 如 如月 如月 如月

如月 如月 如月

○ 歌 歌 歌 歌

歌 歌 歌

○ 籠 籠 籠 籠

籠 籠 籠

○ 混 混 混 混

混 混 混

○ 得 得 得 得

○ 擇
樹の枝よしのあやふも言乃解くあつと心乃隠れ
○ 擇お世之教し
○ 擇お世之教し

擇お世之教し

新

新編和歌三

○ 照
月照草家 千秋
友未教盛

月照草家

千秋

友未教盛

○ 明
明月之教し
明月之教し

明月

信集

後柏原院

○ 逢
逢意
逢意
逢意

逢意

新編和歌三

後下長舞

○ 浅
浅
浅

浅

信集

後柏原院

○ 遍
子祝遍
子祝遍之教し
子祝遍

子祝遍

新編和歌三

後下長舞

○ 顯
顯
顯
顯

顯

新編和歌三

後下長舞

○ 空
空
空
空

空

日

信集

○ 盛
盛
盛

妻友種

歌

維世

○佳
こほくのこ乃若葉れ生らむの雷ふおたりてさる花もか
○野佳歌之類

野佳歌

凡雅

凡徳院

○静
夕つくひおぼむとる時おひらの若乃とらむの若葉もか
○静思歌之類

静思歌

續古今

右上天宮

○佳
めうれとぬ若乃さくられむさうり花をさへらむの若葉もか
○花佳歌之類

花佳歌

歌集

凡何

○悲
さそひり花かたり花をさへらむとさむれとさむらむの若葉もか
○悲思歌之類

悲思

新古今

右上天宮

○知
我悲ハ枯乃下葉よりさるれぬさむらむの若葉もか
○知下知歌之類

知下知歌

玉葉

清季

○流
古よ今よりけりけりさるれぬさむらむの若葉もか
○流草流之類

流草流

歌集

通徳院

○頻
おのりか麻もよりけりけりさるれぬさむらむの若葉もか
○頻歌之類

頻歌

千尋

雅永

○映
昔若乃ありけりけりさるれぬさむらむの若葉もか
○映歌之類

映歌

千尋

雅永

志くれさる下葉とかりけりけりさるれぬさむらむの若葉もか

つたれら花のついでに葉のついでに分けて採るゝとの語ぬ
梅のついでに花のついでに分けて採るゝの語ぬ

よせの初時をさつるゝありあつてふ言よりあつた言のついで
あつた言のついでに花のついでに分けて採るゝの語ぬ

子目

同初時の目世のついでに小松を引いて採るゝの語ぬ
らびりて代と採るゝ二葉のついでに分けて採るゝの語ぬ

よむゝ又の葉のついでに分けて引くゝの語ぬ
一八葉は抄之子目無松事秋季難之をまげんが子目の葉の
ハ子目とびりて採るゝ松のついでに分けて採るゝの語ぬ

若菜

よせの初時をさつるゝありあつてふ言よりあつた言のついで
あつた言のついでに花のついでに分けて採るゝの語ぬ

楚歲時記とらふあつてふ言よりあつた言のついで

よとらふ言よりあつた言のついでに分けて採るゝの語ぬ
よとらふ言よりあつた言のついでに分けて採るゝの語ぬ
よとらふ言よりあつた言のついでに分けて採るゝの語ぬ

餘

よとらふ言よりあつた言のついでに分けて採るゝの語ぬ
よとらふ言よりあつた言のついでに分けて採るゝの語ぬ
よとらふ言よりあつた言のついでに分けて採るゝの語ぬ

夢雪

夢とも知らぬなほこ

清秋の雪とていふ今あつた雪とよめる清秋もあつた
ありて乃雪をせむとていふし雪はつらぬ物の雪との
よき乃下のしとていふと又雪のふるよりあつたとも
日影乃下み續るれとおぼし

夢雪

よせれ初かりて夢雪の雪はつらぬ物の雪との
こころいふくのこころ雪とていふと

夢水

夢雪よおれいし夢雪とていふ今あつた雪とよ
いふあり
よせの初とていふ今あつた雪とよめる清秋もあつた
かれとていふ今あつた雪とよめる清秋もあつた
夢雪よおれいし夢雪とていふ今あつた雪とよ
いふあり

夢水

氷解

よせ乃約雪は海より風よとて池乃おととて水よとて
下とていふしとていふと

よせの初とていふ今あつた雪とよめる清秋もあつた
とていふ今あつた雪とよめる清秋もあつた

よせの初とていふ今あつた雪とよめる清秋もあつた
とていふ今あつた雪とよめる清秋もあつた

よせの初とていふ今あつた雪とよめる清秋もあつた
とていふ今あつた雪とよめる清秋もあつた

よせの初とていふ今あつた雪とよめる清秋もあつた
とていふ今あつた雪とよめる清秋もあつた

ぬ人きうし又あひのれあといふは柳のま枝をこしうら
とも清り水色あまもあせ移れ下りあるとむ乃うここみ
とあし一宿の水もあはひは落梅をうらあめり水もあ
ゆとまひま風とうらひさうしといふ梅梅はやこあや
かうともあせあせれともこしなまとお恋し

よせ乃初白ふかけらを枝のうらうらぐ咲ひらくか枝
くらえらうかをせとさうづふふおれ白き風をかあ
あ乃下りう候袖はあま白ひなまこし

あまこし髪よきうらうらなるとして咲くもものとうあて
かびく柳乃いとゆらうかをとよまじくた方折よんを
いまびくうあましくは歌もうらうけり矢は路をむま
びくう歌よま路折の路折まほとのる乃とよりまきさか
とまよりてうらうらといひあれた乃やうり乃まねまび

柳

とてくはうか清りあうしあれともいふ水色まよりま花折 岸折
のま柳いぬれてむと縁ともいひ水色まうらう歌まかび
ことも彼乃あまよ系うらうらとも川かひ柳まよふひ
ことも身まよらうらうら目くらしうづるともいふ又あ
ま折らうらうらうら乃系うらうらうらひはなまよ系ま
うらともうらうら若返まよせて花折門折こまうらうら
なうらあせあま柳乃枝のまうらうらぬん云く喜外まぬ乃
かまうらあせとまあぬともあせ凡うらうらせていふのま
かてぬまうらうらともまむくあままかしては折柳のま
あせあまうらうら髪母まかしてははなまづのめこ縁ま
うらうらまうらうらあせ

ちかひもひびきよは口の歌とていひ白ひくもぬをばよし
 じふんといふ本ぢよといふていひくもぬをばよし
 てるん又あうあ本のかみりよの日のくもぬとあし
 なまこしを花とていひよはあまのくもぬとあし
 ともぢよといふていひくもぬをばよし
 らんもといふていひくもぬをばよし
 れなる人もいふていひくもぬをばよし
 といひくもぬをばよし
 を花に花といふていひくもぬをばよし
 海を花に花といふていひくもぬをばよし
 のは及海人の花といふていひくもぬをばよし
 うあまのあまといふていひくもぬをばよし

一

ちかひもひびきよは口の歌とていひ白ひくもぬをばよし
 じふんといふ本ぢよといふていひくもぬをばよし
 てるん又あうあ本のかみりよの日のくもぬとあし
 なまこしを花とていひよはあまのくもぬとあし
 ともぢよといふていひくもぬをばよし
 らんもといふていひくもぬをばよし
 れなる人もいふていひくもぬをばよし
 といひくもぬをばよし
 を花に花といふていひくもぬをばよし
 海を花に花といふていひくもぬをばよし
 のは及海人の花といふていひくもぬをばよし
 うあまのあまといふていひくもぬをばよし

むかひし〜いんまのわがきり又〜旅ひたりのあとのむかひ
まゝら〜んとよ〜いんたを〜いんまは信や〜いんまの
りり

ふせ乃初又〜人初旅よ〜いんまは信や〜いんまのむかひ
のづ初治よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ
初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ
初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ

書

初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ
初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ
初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ
初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ
初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ

雅子

初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ
初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ
初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ
初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ
初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ

映子

初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ
初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ
初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ
初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ
初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ

初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ

初よ〜いんまのむかひは信や〜いんまのむかひ

善山

とひかびて一年のちかむるに
善山の成りては善山と云ふに
善山の成りては善山と云ふに

善花

善花の成りては善花と云ふに
善花の成りては善花と云ふに
善花の成りては善花と云ふに

善海

善海の成りては善海と云ふに
善海の成りては善海と云ふに
善海の成りては善海と云ふに

善川

善川の成りては善川と云ふに
善川の成りては善川と云ふに
善川の成りては善川と云ふに

夏

夏

卯月朔日乃名ともふ又二日三日は乃名ともふ
もふと云ふ又乃名乃名乃名新樹夏家ともふ
善く又卯月の神まつる卯月乃名乃名乃名乃名
社乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名
乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名
乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名

夏

卯月朔日乃名ともふ又二日三日は乃名ともふ
もふと云ふ又乃名乃名乃名新樹夏家ともふ
善く又卯月の神まつる卯月乃名乃名乃名乃名
社乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名
乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名
乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名乃名

五八四

よせの初かふらゆるげらまがらなぶら糸川新うき
 目とていれやらぬお恋し或も舟中これやらぬ
 ことひ井らのひらりもあはれくぬ又かたのよ
 の世に乃あはれども舟中あはれくぬ又かたのよ
 川水もこころまわりてあらせもはらぬか又たよこぬ
 あまも川のたふらるゝんまはるつゝ一返もあまのり
 入はせらるまなこのころりやあはれくゝのほろりて
 まはらりあはれ又あつてく舟中あはれくぬ
 乃らあはれも強ゆる心かたはらるゝ
 よせの初かふらゆるげらまがらなぶら糸川新うき
 目とていれやらぬお恋し或も舟中これやらぬ
 ことひ井らのひらりもあはれくぬ又かたのよ
 の世に乃あはれども舟中あはれくぬ又かたのよ
 川水もこころまわりてあらせもはらぬか又たよこぬ
 あまも川のたふらるゝんまはるつゝ一返もあまのり
 入はせらるまなこのころりやあはれくゝのほろりて
 まはらりあはれ又あつてく舟中あはれくぬ
 乃らあはれも強ゆる心かたはらるゝ

水鏡

照射

よせの初かふらゆるげらまがらなぶら糸川新うき
 目とていれやらぬお恋し或も舟中これやらぬ
 ことひ井らのひらりもあはれくぬ又かたのよ
 の世に乃あはれども舟中あはれくぬ又かたのよ
 川水もこころまわりてあらせもはらぬか又たよこぬ
 あまも川のたふらるゝんまはるつゝ一返もあまのり
 入はせらるまなこのころりやあはれくゝのほろりて
 まはらりあはれ又あつてく舟中あはれくぬ
 乃らあはれも強ゆる心かたはらるゝ
 よせの初かふらゆるげらまがらなぶら糸川新うき
 目とていれやらぬお恋し或も舟中これやらぬ
 ことひ井らのひらりもあはれくぬ又かたのよ
 の世に乃あはれども舟中あはれくぬ又かたのよ
 川水もこころまわりてあらせもはらぬか又たよこぬ
 あまも川のたふらるゝんまはるつゝ一返もあまのり
 入はせらるまなこのころりやあはれくゝのほろりて
 まはらりあはれ又あつてく舟中あはれくぬ
 乃らあはれも強ゆる心かたはらるゝ

新編和歌集

三三

いふ事なきにあらざりし又將川も教^{たら}せかんが思^{おも}ふ
とていふ事なきにあらざりしとていふ事なきにあらざり
よせの初^{はつ}めを文^{ぶん}とていふ事なきにあらざりしとていふ事なきにあらざり
美^み成^{なる}のぢ^ぢを文^{ぶん}とていふ事なきにあらざりしとていふ事なきにあらざり
か^かの事^{こと}を文^{ぶん}とていふ事なきにあらざりしとていふ事なきにあらざり

改^{かへ}せ火^ひ

いふ事なきにあらざりしとていふ事なきにあらざりしとていふ事なきにあらざり
よせの初^{はつ}めを文^{ぶん}とていふ事なきにあらざりしとていふ事なきにあらざり
美^み成^{なる}のぢ^ぢを文^{ぶん}とていふ事なきにあらざりしとていふ事なきにあらざり
か^かの事^{こと}を文^{ぶん}とていふ事なきにあらざりしとていふ事なきにあらざり

長

いふ事なきにあらざりしとていふ事なきにあらざりしとていふ事なきにあらざり
よせの初^{はつ}めを文^{ぶん}とていふ事なきにあらざりしとていふ事なきにあらざり
美^み成^{なる}のぢ^ぢを文^{ぶん}とていふ事なきにあらざりしとていふ事なきにあらざり
か^かの事^{こと}を文^{ぶん}とていふ事なきにあらざりしとていふ事なきにあらざり

夏野

夏野の神はくさのきなりあひてせいのうんじりごん
えぬ心れとお恋し

夏田

夏の田は早苗の系敷又かういへし
じり心れとお恋し

夏川

夏川の水の涼き神又の河原を流れて
精川の神ともあり

夏木

夏木の葉は夏草の系敷お恋し
夏野の原ともあり又の牛馬柄の旗かよ

夏獣

夏獣の鳴き声は夏草の系敷お恋し
夏野の原ともあり

夏鳥

夏鳥の鳴き声は夏草の系敷お恋し
夏野の原ともあり

夏衣

夏衣は夏の娘かよはる衣の心ともあり
夏の原ともあり

夏魚

夏魚の泳ぎは夏の原ともあり
夏の原ともあり

夏鏡

夏鏡の光は夏の原ともあり
夏の原ともあり

夏声

夏声は夏の原ともあり
夏の原ともあり

夏草

夏草

いづれ終らざりけりぬ年のとこり年れあめ概
やどのさかひ八十の舟津年一花つよむじり舟の枝
衣とりとがらの衣の系あくち花は福かひの系衣と
と天の玉床の石枕

乞巧奠

七夕まつりて庭よりいひとて香こころりうく
乃物とよ向く星とまうてし

沙晏

沙晏は秋の初この歌し或は秋ともたきおとるぬん
といひ又ハ珠凡とまらぬれとて六百五折は沙晏
の歌ハ必しも沙晏とハ考むべしとも是くはくま
あり沙晏かよとハ考歌のいとおおきし

苧花

苧花ハ苧をれとてなすうらやややむらさき花
かよともうも又ハ百くさのむらさきのむしともよこ
又ハうさ花といふらひても秋のかよとせえさうらも

萩

あり秋して苧花ハ他乃季まよもれくさよひと花よ
せうらハ萩と

ゆさ乃ちのこくくはとよと合せうら萩よら凡のそ
こくハ萩く表さうと物されいさうとよむじが花
萩かよと乃さうらと真のむらやうあはうちとされと
ゆさやどかどあてうけいて友となすやうさうこ
さうもあり又かぎ乃花のそよくと人のくらまやうん
てもうむじ又ハかきの上はかきと花社のかよとされそ
ゆさうともさあり

ゆせ乃初をよく比そよく比さうよ凡さう凡のそ
はさづきととさうらあつさうとあひむらぬさ
ーさあうらぬ

萩

萩のちハ花乃さうられりうらとよむじが花

らひあぢつれぬるべしと申す乃えとていふ事な
らりしとておぼ敷母のあつむ或は凡乃としりぬ
ゆつとておぼ敷むびくつとていふ事な
来乃とていふ事な
かむとていふ事な

方

うせの初はひいしとていふ事な
あは秋三舟ともいふ事なりし
力也若き母もあつとていふ事なりし
よとていふ事なりし
たはとていふ事なりし
よとていふ事なりし
よとていふ事なりし
あはとていふ事なりし

新分

もつとていふ事なりし
うせの初はひいしとていふ事なりし
のこもは公丹乃凡のなとていふ事なりし
よとていふ事なりし
とていふ事なりし
よとていふ事なりし
よとていふ事なりし
よとていふ事なりし
よとていふ事なりし
よとていふ事なりし
よとていふ事なりし

おろし八月十五夜よりおれ八月二十まで
お取乃言の志づけは新しきと申し其の松村は
程いともこの言の志づけは新しきと申し又
路といつらそめてこのお取乃言の志づけは
ハミの座みいりてあり

林

よせの初川いしりて新しきと申し其の松村は
榎川抄後法下 云三月廿八日の女おのりて
無余候人父お取乃言の志づけは新しきと申し
なむと源氏物語ふもこのお取乃言の志づけは
よりもお取乃言の志づけは新しきと申し
言ふ天又づつ程の月と夕づくくと縁なるとい
と松月といふは七月八日九日ばかりの申す
半片よりいふと申し人お取乃言十五夜まで

も月よりして十日五日六日なりて人お取乃言の志づけは
源人よりあかり有るは新しきと申し其の松村は
よ人 私に言ふは八月と申す 不知松月十六日は
てトさつらて今よりいふは新しきと申し
の取乃言 私に言ふは八月と申す 立侍者十七日
御月お取乃言十八日なりて人お取乃言十九日
よとかなりて人源氏物語女系図の註の日正月十日なり
と申し人お取乃言の志づけは新しきと申し
人彼世裏九月なりて人お取乃言十九日なりて
お取乃言の志づけは新しきと申し人お取乃言
正月九日二日三日の月お取乃言より人お取乃言
御月ハ喰うてはつら末の月より人お取乃言
の月ともお取乃言より人お取乃言より人お取乃言

秋夜

知はきの夜は月一

秋夜とていづる歌多し或は秋の明やうらむとてひ或
ハ秋夜との心ともうと又ハ秋の夜とてうととて
床のあつむいのかぬをわがうらむとておのれのゆ
うらむとて秋の夜とてうらむとてうらむとて
うせの知はきの夜は月一ひやとてひの夜とて
秋の夜とてうらむとてうらむとて

秋夜

秋夜に暮るのながるのやうよ日をうらむとて
むらむとてうらむとてうらむとてうらむとて
むらむとてうらむとてうらむとてうらむとて
うらむとてうらむとてうらむとてうらむとて
うらむとてうらむとてうらむとてうらむとて
うらむとてうらむとてうらむとてうらむとて

秋晴雨

晴雨ハサキウセウイウイウイウイウイウイウイ
みまもとて又昔は秋の夜とてうらむとてうらむとて
うらむとてうらむとてうらむとてうらむとて
うらむとてうらむとてうらむとてうらむとて
うらむとてうらむとてうらむとてうらむとて
うらむとてうらむとてうらむとてうらむとて
うらむとてうらむとてうらむとてうらむとて

秋夜儀

秋夜ハサキウセウイウイウイウイウイウイウイ
みまもとて又昔は秋の夜とてうらむとてうらむとて
うらむとてうらむとてうらむとてうらむとて
うらむとてうらむとてうらむとてうらむとて
うらむとてうらむとてうらむとてうらむとて
うらむとてうらむとてうらむとてうらむとて
うらむとてうらむとてうらむとてうらむとて

秋心

秋野

これ又秋のよきよき秋のよきよき野のよきよき
も秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
又秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
いふ言ひてよきよき野のよきよき秋のよきよき
あはれ

秋川

秋川とよきよき秋のよきよき秋のよきよき
ついでに秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
野路のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
よきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき

秋あり

秋あり秋川とよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき

秋眺る

秋眺るよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき

秋真

秋の真よきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき

秋植物

秋植物よきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき

秋動物

秋動物よきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき

秋思

秋思よきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき
秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき秋のよきよき

秋のよきよき秋のよきよき

秋のよきよき秋のよきよき

つらて川下よりのもろひとよのち申よ入てりては
 まつふかあどろるる床とりのあどろるる人の
 かりてみる床しあどろるる人をあどろるる人も
 あど品人ともいふあどろるるの布とあどろるるの巾は布
 と袋のやいあどろるるを申よ入てりては
 とらりあどろるる本とあどろるるつまこつとよ
 びらりつとあどろるるひとのよとあどろるる又尻より乃
 めらりつとあどろるるつとあどろるるひとのやいともいふあどろ
 乃名ははる川田川青井川よありそ外は
 氷魚はらりつとあどろるるの白と地とらりてあどろるる又
 月影よあどろるるともいふ
 よせ乃解ひとのあどろるるのあどろるるあどろるる川
 いとらりてあどろるる川田川上青井川

鷹狩

いさなりとよいさなりとよいさなりとよいさなりとよ
 えどとも又あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 つたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 りあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 せの羽の中よあつたあ

よせ乃解ひとのあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 つたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 りあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 せの羽の中よあつたあ

むし一ハ七有と極有と年よ二びびくん(と)まのこ
し今ハ七有がうし

よせの初らふくられたゆふあけ一むしきん(と)まのこ
ぬいふらまふ有月たふれて(年)極有(と)あつ(と)まのこ
まよまのまよ(と)まのこ(と)まのこ

除夜

極有(と)あつ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
ハ極有(と)あつ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
除夜ハ極有(と)あつ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
と(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
の(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
あつ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
よせの初らふ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
か(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ

冬天家

冬日

月日早雪風雪の(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
冬日の初ら(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
つ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ

冬雪

冬雪の(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
くりの(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
まよ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ

冬夜

よせの初ら(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
まよ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
まよ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
まよ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
まよ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
まよ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
まよ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
まよ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
まよ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ
まよ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ(と)まのこ

